

持続の知覚

星野 徹*

I はじめに

目の前をパトカーが右から左へ通り過ぎるのが見える。サイレンの音が徐々に大きくなるがある瞬間に境にしてやがて小さくなり始め、次第に消えて行く。われわれには変化を知覚する特別の器官が備わっているわけではないが、それにもかかわらず、パトカーが刻々と位置を変え、サイレンの音が変化し続けている様子を知覚することが出来る。変化だけではない。パトカーが通り過ぎる間、背景の風景は同じ姿で見え続けているし、鈍い頭痛も持続している。われわれは変化が生じていないということも知覚することができる。時の流れをわれわれは知覚できるということである。

時の流れの知覚の問題は、アウグスティヌス以来の難問である。もちろん、パトカーの赤色灯から発せられる特定の波長の光が何故赤く見えるのかということや、また、特定の波長の空気の粗密波が何故たたましい音となって聞こえるのかということは、物理的現象と心的性質の関係にかかる飛び切りの難問である。持続の知覚をめぐる問題は、しかし、これらとは性格が少し異なる。それはより手前で、いわば心の内部で生じている出来事に関する難問であり、時の流れを知覚するにはわれわれの意識はどのような構造をしていなければならないか、という問題なのである。もちろん、こうした知覚がどのような脳状態によって実現されるのか、あるいは、持続の知覚体験を脳状態に還元するこ

とが果たしてできるものなのかどうか、といった問いは興味深いものではあるが、それらは、持続の知覚についての問い合わせが与えられた後に初めて問うができるような種類の問い合わせである。

ド・レ・ミの音が連続して奏でられるとき、それらの音は一続きの音として、また、流れ行くものとして聞こえている。ミの音が聞こえているとき、ドの音とレの音はすでに聞こえていないはずである。鳴り始めのミの音も同様である。しかし、それらの音は途切れなく連なって聞こえる。それと同時に、一連の音は遠ざかりつつあるものとして聞こえてもいる。秒針が文字盤の12の前を通過するとき、12の左側にあつたときの針の姿も、そのときの文字盤の姿ももう見えてはいないはずなのに、針は文字盤もろとも突然出現したものとしてではなく、動かぬままそこに存在し続けている文字盤の上を一人動き続けているものとして見えている。ここで、残像や残響を持ち出しても何の説明にもならない。視覚的変化や聴覚的変化の知覚にそれはまったく関与していない。太陽を見た後まぶたを閉じると太陽の残像が見えるが、その残像もしばらくすると消えて行く。われわれは残像の変化自体を知覚することができる。変化の知覚に残像が関与しているのならば、残像の変化の知覚には残像の残像が必要だということになるだろう。しかし、残像の残像がどのようなものか想像することはできないだろう。またメロディーを知覚するためには直前の音が聴覚世界のどこかに残っていなければならぬとしたら、単声の音楽を聴いているときにも常に和音や不

* ほしの・とおる

埼玉大学教養学部助教授、哲学

協和音が鳴り響いていることになるだろう。一方、記憶を持ち出すことも同じように的外れである。確かに変化の知覚に記憶がかかわる場面は存在する。たとえば、満月が天頂付近にいるのを見た人は、先ほど地平線近くにいた満月を思い起こして、月が天空を移動したことを知り、時が経ったことを知るだろう。しかし、それは満月が動いたということを知ることであって、満月が動いていることを現在進行形で知覚することではない。パトカーが目の前を横切り、秒針が12の前を通過することを知覚することは、満月が動いたことを知ることとは別のことである。

ここまで記述が、心の内と外を混同しているというように思われるかもしれない。パトカーや秒針が直前の位置にはもう存在せず、ドヤレの音がもう鳴り響いてはいないということは確かであるが、それは物理的世界におけることであって、意識の中においては直前の見えや音が消えてしまうなどということはない。ただ変化が知覚されているだけであり、ここには説明されるべきものは何もないのだ、というようだ。それならば次のような例を挙げることもできるだろう。鎮痛剤のおかげで頭痛が急速に治まる、突然眠気が襲ってくる、怒りがむらむらとこみ上げてくる、こうした場合、知覚の対象が外的世界に存在し、その対象の変化がさらに知覚されているというわけではない。単に心的状態の変化に気づいているのである。ところで、怒りがこみ上げてくるのを感じるとき、直前の心的状態が同時に感じられているわけではないだろうし、直前の心的状態が想起されているわけでもないだろう。しかし、それにもかかわらず、その人は怒りの強度が増大しつつあることを感じているのである。もちろん、怒りを感じていない状態の残像などというものを想定することもできないだろう。

持続の知覚を説明するモデルとして、現在を持続時間ゼロの点的なものではなく一定の幅を持ったものと考えるものと、短期記憶に訴えるものが拮抗しているというのが現状である¹。以下において、前者を批判し、後者の改訂版を提案するつもりである。まずは、現在が幅を持つとする説の検討からはじめよう。

II 見かけの現在

現在には幅があると考える代表者はジェイムズである。

実際に認識されている現在とは、ナイフ状のものではなく、馬の鞍型をしており、その上にまたがってわれわれは時間の二つの方向を眺めている。われわれの時間知覚の構成単位は持続なのである。[...]一方から他方への継起が知覚されるのは、それがこの持続の塊の部分となっているからである。われわれは最初に一方の端を感じた後に他方を感じし、こうした継起の感覚から二つの間の時間間隔を推論しているわけではない。われわれは、時間間隔を全体として、両端がそれに組み込まれているものとして感じているのである (James, 1950, pp.609 ~ 610)。

そして、このような幅を持った現在をジェイムズは「見かけの現在」(specious present) と呼ぶ。

それでは現在が幅を持つとはいってどうしたことなのだろうか。見かけの現在の持続時間を仮に三秒間としてみよう。それは物理世界における三秒間の変化をひとまとまりのものとして知覚するということだろうか。ではその知覚体験は瞬間的な出来事なのだろうか、それとも体験自体持続時間を持つのだろうか。それに、

痛みや怒りのような心的出来事とみなされるものが三秒間分ひとまとめに知覚されるとはかなり奇妙なことである。組織の損傷や痛みに対応するニューロンの発火三秒分を一気に知覚するというのならばまだしも、三秒続いている痛みを瞬間に、あるいは三秒未満の持続時間のうちに知覚するとは、われわれの持つ痛み概念に矛盾したことのように思われるからである。痛みが三秒間続いていると感じているとき、見かけの現在説が正しければ、痛みの体験そのものが三秒前から生じているわけではないということになるはずである。すると、三秒前に感じられないまま始まっていた痛みを、今、三秒間分一気に感じ始めたということになるのだろうか。しかし、痛みとは感じられるものであり、感じられない痛みは痛みではないとする常識的見解に従うならば、痛みが三秒続くとは、痛みの体験が三秒続くということ以外のことを意味しないだろう。

ここで、議論の混乱を避けるために、体験によって表象される出来事の持続時間と体験の持続時間を区別しておく必要があるだろう。死に直面した人には、自分の全人生の体験が瞬間に走馬灯のようによみがえるという。それが事実ならば、その人は数秒のうちに、生涯の出来事を表象していることになる。前者を体験時間、後者を表象時間と呼ぶことにしよう。体験時間の長さと表象時間の長さは、走馬灯体験の例を見るまでもなく、必ずしも一致するわけではない。たとえば就寝前に一日の出来事を反芻する人は、数分の体験時間で十数時間を表象することになる。しかし、想起体験とは違って、知覚体験の場合、両者の開始時刻と終了時刻は一致すると一般には考えられているだろう。演奏時間一時間の交響曲を聞く場合、最初の音が鳴り始めると同時に最初の音の聴覚体験が生じ、最後の音が鳴り止むと同時に交響曲の聴覚体験

は終了する、また、聴覚体験の持続時間もちょうど一時間である、というように。しかし、ジェイムズ流の見かけの現在説によれば、知覚においても表象時間と体験時間は一致しないということになる。

それでは、三秒間の見かけの現在に対応する体験時間はどれほどの長さがあるのだろうか。三秒間の出来事を人は何秒かけて体験するのだろうか。ド・レ・ミの音がそれぞれ一秒間ずつ連続的に鳴らされた場合、見かけの現在が三秒間だとすれば、ド・レ・ミの音はひとたまりとなって知覚されることになるだろう。ド・レ・ミの音の知覚体験の所要時間が x 秒であると主張する人がいたとしよう。そのとき、次のような問い合わせにその人は何と答えるだろか。すなわち、「最初の $x/2$ 秒間のわれわれの聴覚体験はどのようなものになるだろうか。」これはもちろん正当な問い合わせである。そしてこの問い合わせに対して、「 x 秒間の体験時間で三秒間の出来事が表象されるのならば、 $x/2$ 秒ではドの一秒分とレの最初の 0,5 秒分がひとたまりとなって聞こえている」と答えることはできないはずである。それは、見かけの現在が三秒間であるとする仮定に反することである。見かけの現在が存在することは、表象時間には単位があるということであり、見かけの現在が三秒であるとは、人の意識には、二秒間でも四秒間でもなく、常に三秒間の出来事が現前しているということだからである。どの時間帯を取っても、どれほどの時間幅をとってもそれは同じことである。可能な答えは次の二つに限られるだろう。「最初の $x/2$ 秒間は何も知覚されていない、実は知覚体験の所要時間は x 秒ではなく $x/2$ 秒だったのだ」というものか、あるいは、「ド・レ・ミ三秒分の聴覚世界が現前しているのである」というものである。前半 $x/2$ 秒間で何も知覚されていないと答えた人には、「では、後半 $x/2$ 秒の最初の $x/4$ 秒の聴覚

体験はいかなるものか」と問うことができる。前半 $x/2$ 秒間でド・レ・ミ三秒分の知覚体験が生じているという答えが返ってきたときは、「前半 $x/2$ 秒の体験時間の最初の $x/4$ 秒には何が聞こえているのか」とさらに問えばよい。そしてこの問いは際限なく続く。

結局のところ、三秒間の見かけの現在を認める限り、体験時間のどの瞬間をとってみても常に三秒間の出来事が一挙に現前しているか、あるいは、何も現前していない時間帯があるか、どちらかである。第一のモデルでは、体験は連続的であり、第二のモデルでは離散的である。連続モデルはさらに、表象内容も時々刻々連続的に変化して行くものと、同一の表象内容が一定の時間現れ続けているものの二つに分類されるだろう。体験時間が持続を持つという言い方が許容されるのは後者のケースだけである。一方、体験が離散的ならばわれわれの意識には空白の時間帯があるということになる。しかし、表象時間に断絶さえなければ空白の意識が生じることはないだろう。

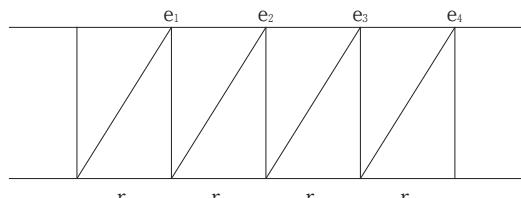


図 1

上の図は、体験の離散的モデルを模式的に表現したものである²。時は左から右へ流れて行く。 $e_1 \sim e_4$ は体験の系列を、 $r_1 \sim r_4$ はそれぞれの体験に対応する見かけの現在を表している。 e 同士の間隔が狭まれば、隣り合う見かけの現在の内容が重なり合うことになるだろうし、 e の系列が連続的ならば第一のモデルとなるだろう。いずれにしても、見かけの現在説は、おそらくはジェイムズの意図に反して、持続時間ゼロの

点時刻において持続の知覚が生じるという主張を含意することになるだろう。ド・レ・ミの音は、瞬間的な体験において、三秒間の持続を持ったものとして、ド・レ・ミの順に連続的に鳴り響いているものとして聞こえているのである。

物理世界において、持続時間ゼロの瞬間におけるものの状態は前後の状態によって決定される。ある瞬間の壁の色は前後の色によって決まる。ずっと白のままの壁はどの瞬間をとっても白い。前後の状態抜きの、ある瞬間の壁の色を問題にすることはできない。白地に赤の日の丸のふちが何色をしているかという問い合わせ、ふちそのものの色を問おうとするものである限り答えのようのない問い合わせであるのとそれは同じことである³。意識においては瞬間的に持続の知覚が生じるとは、おそらくは法外な仮説である。

再び痛みについて考えてみよう。 e_1 において、私には三秒間の痛みの感覚が現前している。 e_1 より前にも後にも痛みが感じられることがなかったとすれば、この痛みはいつ始まり、そして、何秒間続いたのだろうか。ジェイムズは、われわれは馬の鞍にまたがり時間の両方向を眺めていると言う。この場合、私は何を眺めているのだろうか。三秒続く痛みだろうか。そうではないだろう。眺められるべき持続的痛みなどここには存在しないし、感じられるべき痛みが存在するという言い方も正確ではない。痛みを感じるとは、痛みが存在し、さらにそれに対して感じるという作用が加わっているということではなく、痛みと呼ばれる独特の「感じ (feeling)」が生じているということだからである。痛みは感じの対象ではなく感じの質である。そうだとすれば、ここでは、単に、三秒間の痛み感覚が瞬間に生じているだけであるということになるだろう。見かけの現在説が正しければ、痛みを感じているとき、われわれは恒常的な錯覚に陥っているのである⁴。

この問題は体験の離散モデルに特有のものではなく、連続モデルにも付きまとうものであるが、連続モデルには更なる固有の難点が存在すると言わざることがある。この難点は、体験時間の間隔が短いため、見かけの現在の時間が重なり合うようなケースでも生じるものである。先の図で、 e_1 と e_2 の間隔が狭まれば、それぞれの見かけの現在、 r_1 と r_2 の内容の一部が重複するようになる。一秒間分の表象内容が重なるとすれば、たとえば、 r_1 はド・レ・ミ、 r_2 はミ・ファ・ソとなり、ミの音が二度現れることになるだろう。連続モデルの場合、同じ音が数限りなく体験されるはずである。しかし、日常的にそのようなことが生じているとは信じ難いことである。ミの音は一度聞こえるだけであり、何度も繰り返し現れているように思われないからである。デイントン (Dainton, 2000) によれば、この内容重複問題をどのように処理するかということが、見かけの現在説を主張する者に課せられた最大の宿題である。

しかし、おそらく、内容重複問題は見かけの現在説の根本動機を見誤った結果発生したものである。原理主義的見かけの現在説主義者ならば、見かけの現在説がこのような問題を引き起こすことはない、と答えるだろう。ミの音が二度現れ、あるいは三度現れるとしても、そのことに気づくためには、われわれは直前の見かけの現在の内容を何らかの形で把握しているのなければならない。その把握の仕方は知覚的なものではないだろう。直前の見かけの現在の内容を知覚的に把握しているということは、それが今現在の見かけの現在の一部と化しているということだからである。内容重複問題が生じると考える人は、結局のところ、直前の見かけの現在の内容が短期記憶のようなものによって保持されている、と考えていることになるだろう。しかし、原理主義者は短期記憶の存在を拒否す

ることが出来る。あるいは、変化の知覚に短期記憶が関与しているということを否定することが出来る。彼らが見かけの現在に訴えたのは、他ならぬ変化の知覚を説明するためだったからである。純粹の見かけの現在は独立自存しているのでなければならないのである。

だがこれで内容重複問題が一件落着したというわけではない。ド・レ・ミからレ・ミ・ファへと見かけの現在の内容が変化したとしよう。そのとき、われわれにはレ・ミ・ファが聞こえているだけではない。われわれはそれと同時にドの音が消えて行ったことにも気づいている。見かけの現在が相互に独立しており、変化の知覚に短期記憶も関与していないとするなら、ドの音が消え去ったことをわれわれはどうにして知ることができるのだろうか。おそらく、変化の知覚を説明し尽くすためには、見かけの現在原理主義者といえども、どこかで短期記憶に訴えなければならないのである⁵。しかし、ここで短期記憶を導入してしまえば元の木阿弥である。再び内容重複問題が頭をもたげてくるからである。今聞こえているレとミは先ほども聞こえていたのではなかっただろうか。それならば、いつそのこと、さまざまな問題を抱える見かけの現在説を潔く捨て去り、直接、短期記憶に訴えてみたらどうだろうか。

III 短期記憶

a, b, c, の音が連続的に聞こえているとき、短期記憶説によれば、それらがひとまとまりに聞こえているわけではない。bが聞こえているときにはaはもう聞こえてはおらず、cが聞こえているときには、aもbも直接の聴覚対象としての資格で意識に現前してはいない。しかしだからといってそれらは意識に何の痕跡も残さずに消え去ってしまったわけでもない。何らか

の形でそれらは現在の意識にとどまっている。bが聞こえているとき、aは短期記憶されているのである。これは、a, b, cが音である場合に限ったことではない。運動体の位置でも、痛みの状態でも、それは同じことである。フッサールにならってこの種の短期記憶を「過去把持」(Retention)と呼ぶことにしよう。ここで過去把持されたaは想起の対象となるものではない。過去把持と長期記憶は別物である。aの過去把持はbの現在印象に不可避的に付随するものであり、両者があいまって現在の体験を構成しているのである。

bの次にcが聞こえてくるとbが過去把持されことになるが、それと同時にaは過去把持の過去把持となる。過去把持を「'」で、過去把持の過去把持を「''」で表すことにすれば、a, b, cの音を連続して聴くという体験は次のように示されるだろう。

a → a' b → a'' b' c

こうした過去把持の系列は無限に続くことはできないだろう。われわれの意識のあるいは脳の容量は無限ではないからである。見かけの現在に限界があるように、過去把持の系列にも限界があることだろう。さて、それでは、見かけの現在に代わって過去把持を導入することで変化の知覚は説明されるのだろうか。短期記憶説がこの段階にとどまるならば、答えは否である。見かけの現在説は、いくつかの看過できない欠陥があるにもかかわらず、曲がりなりにも変化の知覚を説明するという役割だけは果たすことができていた。音の系列は、それが見かけの現在に収まる限り、ひと連なりのものとして、次々に鳴り響くものとして聞こえているだろう。それに対して、感覚印象が過去把持されるだけでは、高々、音がひと連なりのものとして聞こ

えてくることが確保されるだけであって、音が遠ざかりつつあるという体験が生じることはないだろう。

メロディーが流れる、車が遠ざかる、痛みが消えて行く、などといったことが知覚されるとは、過去の知覚風景が現在印象と一緒にるものとして体験されているとともに、現在・過去を含めた知覚風景全体が遠ざかりつつものとして体験されているということである。cが聞こえたときに、bが過去把持され、aが二重に過去把持されているとすれば、確かに、bが先ほど鳴り、その前にはaが鳴っていたという意識は成立するだろう。しかしこれは、変化の知覚の一面に過ぎない。時計の短針の位置が変わったのを知覚することによって短針が動いたことを知るということが、針が今現在動いているという針の運動の現在進行形の知覚ではないように、bが短期記憶されていることによって生じるのも、bが遠ざかりつつあるという現在進行形の変化の知覚ではないだろう。現在印象と先立つ現在印象の過去把持だけでは変化の知覚は生じない。単純な短期記憶説には何かが欠けている。それでは、表象時間に幅を持たせる見かけの現在説に陥ることなく、短期記憶だけで、単なる意識の流れではなく、流れの意識を生み出すことは果たしてできるのだろうか。

いったい、bが遠ざかりつつあるとはどのようなことなのだろうか。遠ざかるとは、何かが何かから遠ざかることであり、何かが遠ざかりつつあることを知るには、比較対照するための参照枠のようなものが存在する必要がある。メロディーの知覚の場合、bは何かから遠ざかりつつあるのだろうか。cが聞こえてきたときに、それと同時にbの印象も過去把持されているならば、bとcは連続して、また、bはcの直前に鳴っていた音として聞こえている。それに加えて、bが遠ざかりつつあるものとして知覚され

ているとすれば、何が参照枠の役割を果たしているのだろうか。

今過去把持されている b は、先ほどは現前していた。また今二重に過去把持されている a は、先ほどは単に過去把持されていただけであり、さらにその前には現前していたはずである。b と a が遠ざかるとは、このように、b が現在印象から過去把持へと移行し、a が現在印象から過去把持へ、さらに、過去把持から二重の過去把持へと移行するということだろう。したがって、b と a が遠ざかりつつあると知覚するとは、これらの過程を丸ごと知覚するということである。そのためには、過去把持された b と二重に過去把持された a とともに、先ほどの b と a の姿が何らかの形で現在の意識にとどまつていなければならぬということになるはずである。直前の b と a の姿と、さらにそれに先立つ a の姿が参照枠の役割を果たしているということである。われわれは、過ぎ去った音の現在の姿だけでなく、先立つ瞬間ににおける同じ音の姿にも気づいているのである。以上を図式化してみよう。

$a \rightarrow b \rightarrow c$ の順番で音が聞こえてきたとき、最初に聞こえていた a は、次の瞬間には過去把持され、新たに b が聞こえてくる。その次には、c が聞こえ、b は過去把持の、a は過去把持の過去把持の対象となる。このようにして形成される $a \rightarrow a' \rightarrow b \rightarrow b' \rightarrow c$ という系列は、知覚対象の時間的変容を表している。しかし、これは聴覚体験そのものの変容を表すものではない。音が流れて行くという十全の聴覚体験は、 $a'' \rightarrow b' \rightarrow c$ だけでなく、直前の $a' \rightarrow b$ と、その前の a を含まなければならない。すなわち、われわれは、上記の知覚対象の時間的変容の系列全体を何らかの形で認知しているのである。聴覚体験の変遷の正確な姿は、結局のところ、図 2 のようなものとなることだろう。右端のアルファベットの三角形全体が、c が聞こえているときの聴覚

体験を表している。a と b が遠ざかりつつある様がそこには描かれているだろう。

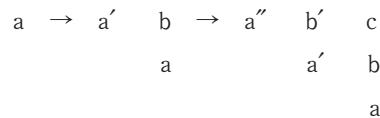


図 2

ここで、 $a'' \rightarrow b' \rightarrow c$ が、知覚対象の過去把持の系列だとすれば、その下に現れる $a' \rightarrow b$ は、直前の体験内容そのものである。しかし、直前の体験内容がそのまま現在の知覚体験のうちに含まれているわけではなく、それは何らかの変容を被っているはずである。直前の聴覚印象が過去把持されていると同時に、直前の体験内容も過去把持されているということになる。したがって、より正確には、過去把持された直前の体験内容が変化の参照枠となっている、と言うべきだろう。過去把持された知覚対象だけでなく、過去把持された直前の体験内容も現在の知覚体験を構成しているのである⁶。

ここでいくつか注意すべきことがある。 $a'' \rightarrow b' \rightarrow c$ を知覚対象の過去把持の系列と呼ぶことにはやや問題があるかもしれない。音の流れやパトカーの動きだけではなく、痛みの強度の変化や、怒りや喜びの感情の動きといったものにもわれわれは気づくことができるが、痛みや怒りを知覚対象とみなすことはできないだろう。これらの場合は、むしろ、感覚 (feeling) の質の過去把持の系列と言う方がより正確だろう。いずれにしても、右端の図には、a と b が複数回登場している。上段においては過去把持の直接の対象として、また、二段目以降においては過去把持された先立つ体験内容の一部としてである。これは、短期記憶説において、変化の知覚が意識の高階性と密接に関係しているということを示唆するものである。音が遠ざかりつつあ

ることに気付くことが、二階の意識作用であるというわけではないが、後者は前者の不可欠な構成要素である。長期記憶において類似の例を見出すことができるが、それは次のようなものである。

私は小学校の入学式の様子を思い出している。そして、今思い出している入学式の様子は、これまで何度も思い出してきたものもある。入学式の直後には先ほど終えたばかりのものとして、卒業式のときには六年前の出来事として。私は入学式を思い出だすとともに、それと同時に、同じ入学式を、このようにこれまで何度も思い出してきたものとして思い出すこともできる。入学式を思い出すことが一階の想起ならば、入学式を思い出したことを思い出すことは二階の想起である。しかし、ここで私は入学式を二度、三度と思い出しているわけでもなければ、二つの異なった入学式を思い出しているわけでもない。ひとつの入学式を異なった視点から眺めているのである。ただし、高階の想起によって、小学生時代が遠くなつたという感慨がわいてくることはあっても、小学生時代が遠ざかりつつあるという感覚が生まれてくることはない。長期記憶の対象となるような出来事は、十年前の出来事も、十日前の出来事も、さらに十分前の出来事でさえも、それを現在進行形で遠ざかりつつあると感じることはわれわれにはできない⁷。想起の高階性は時の流れの感覚を与えるではない。しかしながら、それによって過去は厚みを獲得する。

人格の同一性をめぐる議論において、他人の記憶を徐々に移植していったときに、どこで人格の交代が生じるか、といった種類の問い合わせられることがある。たとえば、私 T. H の記憶が、デカルトの記憶と交換されると想定してみよう。ゼロ歳時から始めて徐々に記憶が移植されていった場合、どこかで私の中の T. H の

記憶とデカルトの記憶がちょうど半々になるはずである。このとき、私は T. H なのだろうか、デカルトなのだろうか⁸。人格の同一性の問題における記憶説の支持者は、この問題をどのように処理するだろうか。しかしこれは、想起の高階性を無視したあまりに素朴な思考実験である。私の記憶を古い順に次々と抜き取るという作業はそれほど単純なものではない。現に私はつい先ほども小学四年生のときの学芸会の模様を思い出していた。したがって、私から小学生時代の T. H の記憶を根こそぎにするには、数分前の T. H の記憶まで消去しなければならないことになるだろう。新たにデカルトの記憶を注入するとなれば、事態はさらに複雑化する。記憶を入れ替えるとはどのようなことなのでしょうか。先ほど私は、T. H として、T. H の小学生時代ではなく、デカルトの十歳のころのことを思い出していたことになるのだろうか。思い出すとしたら、自分のこととしてだろうか、それとも他人事としてだろうか。あるいは、先ほどの想起体験そのものが記憶から抹消されるのだろうか。いったい、どのような状態になったときに T. H の記憶とデカルトの記憶が半々になると言えるのだろうか。

また、われわれはしばしば何かを忘れてしまったといって嘆く。忘れてしまったことを嘆くことができるのは、忘れてしまったということを知っているからであり、忘れてしまったということを知ることができるのは、あるときまでは今は忘れてしまったものごとを覚えていたということをわれわれが知っているからである。忘れたということを自覚している人は、あるときまではそのことを覚えていたということは覚えているのである。その人は、想起体験は思い出すことができるが、その想起の内容を思い出すことができないのである。われわれが一階の想起能力しか持たなかったとすれば、他人に指

摘されるまでは、誰も自分が何かを忘れたことに気がつかないだろう。

短期記憶説が正しければ、同じような高階の作用が知覚体験においては常に生じているのである。直前の印象 b は、過去把持されているとともに、一瞬前には現前していたものとして、また a は、二重に過去把持されているとともに、一瞬前には過去把持されており、さらにその前には現前していたものとして、それぞれ二階の作用の対象となっている⁹。ただ、長期記憶の場合、想起は意図的でありうるが、過去把持はそうではない。知覚には常に過去把持が付きまとつ。知覚だけではない。いわゆる意識の流れが意識の本質的特長のひとつだとするならば、過去把持はあらゆる意識状態の不可欠の構成要素である。また、長期記憶において一階の想起は必ずしも二階の想起を伴うわけではないが、意識が常に流れの意識でもあるとするならば、過去把持は常に二階の意識作用を伴うのでなければならない。

もうひとつの注意点は、直前の心的内容が短期記憶されるといつても、そのすべてが手付かずのまま丸ごと記憶されるわけではないということである。a、b、c に d、e が続いた場合の体験の変容を図示すれば次のようになるだろう。

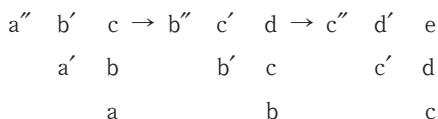


図 3

もちろん、一段目の過去把持の系列はさらに続くかもしれない。その場合は、この図は横に伸びて行くとともに縦にも伸びて行くことになるだろう。しかし過去把持の系列に限界があるとすれば、あるときの感覚印象もいつかは短期記憶からはじき出されるはずである。すると、

過去把持される直前の心的内容においてそれに対応する部分が同じように消えて行くのである。まず a の痕跡が、次いで b の痕跡が意識から消えて行く。ただし、ここで a の痕跡が消えて行く、と言ったからといって、消えて行ったことを知るには更なる短期記憶が必要なのではないか、との疑念を持つ必要はない。図 3 の左端の三角形が、a が消えて行くという意識を表している。a の痕跡とともに消えるのは、a ではなく、a が消えて行ったという意識そのものである。こうして、われわれの知覚体験は、先立つ体験を巻き込みながらも、雪面を転がる雪玉のように時とともに肥大するといったことはなく、同じ大きさを保ったまま、刻々と変容して行くのである。

ところで、短期記憶説によって、確かに音が遠ざかりつつあるという現在進行形の変化の知覚は説明されるものの、体験の変化そのものの知覚は説明されないのではないか、との疑問がわいてくるかもしれない。上の図に明らかなように、われわれの体験内容は刻々と変化している。われわれは、音が遠ざかりつつあると知るだけではなく、先ほどの体験が遠ざかりつつあることもまた知っているのではないだろうか。これは、短期記憶説だけではなく、見かけの現在説に対しても向けられる問い合わせであるが、短期記憶説はこの問い合わせに満足の行く答えを与えることができるだろうか。

体験の流れを知覚するとは、先ほどの体験が今は過去把持されているとともに、その体験が先ほどは現前していたということが、何らかの形で現在の意識に組み込まれているということなのだろうか。このことを音の例に倣って図示することもできるが、その図はきわめて複雑なものとなるだろう。それに、そのようにして体験の流れが知覚されたとしても、今度は体験の流れを知覚している体験が存在することになり、

この高次の体験の変容を知覚する可能性が問わされることになるだろう。そして、こうした過程は際限なく続くことになる。また、無限背進がありえないとするならば、どこかの段階で、それ自体は変容を免れている不变の意識のようなものが存在するというのだろうか。フッサールを捕らえてはなきなかったのはこうした種類の問題だったのだろうか。いずれにしても、この問題の起源は次のようなものである。

体験が変容しつつあることを現在進行形で知るために、直前の体験内容と、直前の体験内容をそれに先立つ体験の内容とともに包含する二階の体験の内容が、何らかの形で現在の意識の構成要素となっていなければならぬとすれば、直前の体験内容とみなされていたものは完全ではなかったということになる。二階の体験内容の残余部分がそれに加わらなければならなくなるからである。ここで顔を出しているのは、主体の脱捕捉性と呼ばれることがあるおなじみの現象である。たとえば、私は、今現在の他人の状態や、過去の自分の状態ならば漏れなく記述することが出来るが、今現在の自分の状態については、それは不可能である。自分の状態を記述するという行為自体が今現在の自分の状態の一部であるからである。記述を完璧なものにするためには、「今私は自分の現在の状態について記述している」という文を加えなければならない。するとさらに完璧を期すためには、「今私は「今私は自分の現在の状態について記述している」と記述している」という文を加えなければならない。この過程は際限なく続く¹⁰。同じように、私は今現在の自分の体験内容を漏れなく対象化することは出来ない。対象化する意識作用が現在の体験内容の一部となるからである。そして、この主体の脱捕捉性が、体験内容の過去把持と、それを包含する高階の体験の過去把持の関係に所を変えて姿を現したという

が、体験の変容の知覚に伴う無限背進問題の由来である。諸悪の根源は、変化の現在進行形的知覚を説明するために二階の意識作用に訴えるという、改訂版の短期記憶説の発想そのものにあるように思われる。それでは、われわれは、無限背進の発生を理由に短期記憶説を捨て去るべきなのだろうか。

体験の変容に現在進行形で気づくとはどのようなことだろうか。われわれはメロディーが流れ行くことに気づき、パトカーが遠ざかって行くことに気づく。それとともに、メロディーが流れ行くという体験が遠ざかりつつあり、パトカーが遠ざかりつつあるという体験が遠ざかりつつあるということにわれわれが気づいているとでもいうのだろうか。メロディーが流れ行くことの体験が遠ざかることと、ある音が遠ざかりつつあること、パトカーが遠ざかりつつあるという体験が遠ざかりつつあることと、パトカーが遠ざかりつつあることはどこが違うのだろうか。少なくとも私は、パトカーが遠ざかりつつあるという体験が遠ざかりつつある、という体験をしたことはないし、そのような体験をしてみようとして、目の前の光景を凝視したり、心のうちを覗き込んだりしてみても、そこから得られるのは、相変わらずパトカーが遠ざかりつつあるという体験だけである。小学四年生のときの学芸会の様子を思い出していることを思い出していることを思い出すことなら、やろうと思えばできるかもしれないが、そもそも私には、パトカーが遠ざかりつつあるという体験が遠ざかりつつある、ということを知覚するために心を覗くとはどのようなことをすることなのか見当がつかない。われわれに体験できるのは、パトカーが遠ざかりつつあるということだけであって、パトカーが遠ざかりつつあるという体験が遠ざかりつつあることを知覚することなど、人間の脳の、あるいは、心の構造から

して、初めからできない相談なのではないだろうか。たとえ、体験の変容を現在進行形で知覚できる生物がいたとしても、その知覚能力は無用の長物だろう。それに対して、いわゆる一階の変化の知覚は死活的に重要である。ライオンが近づいていることを、現在進行形ではなく、現在完了形でしか知覚できない生物は絶滅してしまっているだろう。一階の変化の知覚の能力を欠いた高等生物はおそらく存在しない。そして、二階の変化の知覚の能力を持った高等生物もおそらく存在しないのではないだろうか。

しかし、だからといってわれわれが体験の変容に気がつくことができないというわけではない。われわれは、先ほどの体験と今の体験を比べることができるし、先ほどの体験と二日前の体験を比べることもできる。現在完了形での変化の知覚ならばいくらでも可能である。われわれに閉ざされているのは現在進行形の知覚の可能性である。

時の流れを知覚するための感覚器官をわれわれは持っていない。また、時の流れの知覚能力を欠くということがどのようなことであるのか、われわれには想像することができない。色の知覚や音の知覚の能力の場合はそうではない。われわれは、色を知覚できない状態や、音が聞こえない状態を想像することができるし、そのような想像上の人物が、色彩や音の知覚に関する神経科学の専門家となった様を想像することもできる。そして、そのような神経科学の専門家は、赤を見たり、ピアノの音を聴いたりすることはどのようなことか、ということを知ることができるだろうか、と問うのが、周知の知識論法である。時の流れの知覚に関しては、このような思考実験さえ不可能である。

色の知覚や音の知覚についてならば、それらの知覚体験を実現する、あるいは、それらに対

応する脳状態を見つけ出すことはできるかもしれない。また、体験の持続時間と脳状態の持続時間は一致するかもしれない。聴覚野のニューロンの発火と聴覚体験は同じ時刻に始まり、同じ時刻に終わるかもしれない。というより、両者の一致が、特定のニューロンの発火と聴覚体験との間の対応関係の決定要因であるだろう。それでは、持続の知覚を実現する、あるいは、持続の知覚に対応する脳状態を、われわれは発見することができるだろうか。いったいどのようにしてそれを発見するのだろうか。そもそも、そのような脳状態は存在するのだろうか。

注

- 1 前者については Dainton (2000)、Tye (2003) を、後者については Gallagher (1998)、Kelly (2005) を挙げることができる。また、リベット (Libet, 2004) の理論も前者の一ヴァージョンとみなせるかもしれない。
- 2 デイントン (Dainton, 2000) による図に手を加えたものである。
- 3 瞬間の問題については星野 (1995) を見られたい。
- 4 タイ (Tye, 2003) によれば、仮現運動が見かけの現在の例証となっているという。適当な距離に配置された点を適当な時間間隔をあけて光らせると、光は最初の点から次の点へ連続的に動いて行くよう見える。グッドマン (Goodman, 1978) は、一つ目の点から二つ目の点に沿った時空間を、二つ目の点が光る前に埋めることができるのでどうか、と問うている。確かに、見かけの現在が存在するとすれば、グッドマンの問い合わせに答えるのは比較的容易である。最初の点が光ったとき、まだ光の知覚体験は生じていない。二番目の点が光ると、初めて光の知覚体験が生じるが、それは、初めから動いているものとして知覚される。仮現運動が生じているとき、幅を持った見かけの現在に、二つの点の継起的な発光がうまく収まっているのである。しかし、短期記憶説が仮現運動を説明できないわけではない。短期記憶説によれば、初めは一番目の点が光っているのが見えるだけであるが、第二の点が発光すると、最初の知覚に関する短期記憶が書き換えられ、あたか

も、初めから最初の点が第二の点の方向へ向けて動いていたと知覚されていたかのように見えるのである。デネット (Dennett, 1991) の表現を借りれば、見かけの現在説においてはスターイン流の改竄が行われ、短期記憶説においてはオーウェル流の改竄が行われているということになる。

- 5 見かけの現在説が、どこかで短期記憶を導入しなければならなくなるということについては、ケリー (Kelly, 2005) が指摘している。
- 6 フッサー (Husserl, 1966) は、時間的対象の同一性を構成する過去把持の横の志向性に加えて、意識の統一を構成するものとして、過去把持の縦の志向性、という概念を導入している。過去把持の縦の志向性とは、過去把持が体験内容へ向かうということだとすれば、おそらくフッサーに反して、二つの志向性があいまって初めて流れの意識が生じるのである。
- 7 野矢 (野矢、2002) は、一つの過去の出来事に対して複数の時間的視点を取ることによって、その出来事が遠ざかりつつあるという意識が生じる、という説を提示し、検討しているが、想起の対象となる出来事が遠ざかりつつあると感じられることは決してないように思われる。
- 8 パーフィット (Parfit, 1984) がこのような思考実験を展開している。
- 9 ここで二階の作用と言われているのは、過去把持の過去把持のことではなく、直前の体験内容の過去把持のことである。体験内容の過去把持において、直前の印象は、先ほどは意識に現前していたものとして把持されているのである。
- 10 意識の高階性については星野 (2001) を見られたい。

文献表

- Dainton, B., 2000, *Stream of Consciousness*, Routledge.
- Dennett, D.C., 1991. *Consciousness Explained*, Little, Brown. (『解明される意識』山口訳、青土社)
- Gallagher, S., 1998, *The Inordinance of Time*, Northwestern University Press.
- Goodman, N., 1978, *Ways of Worldmaking*, Hackett Publishing. (『世界制作の方法』菅野、中村訳、みすず書房)
- 星野 徹、1995、「無限と瞬間」『埼玉大学紀要 教養学部』第31巻第1号。
- 星野 徹、2001、「決定論と自己予測」『埼玉大学紀要 教養学部』第36巻第2号。
- Husserl, E., 1966, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins(1893-1917)*, ed. R. Boehm. *Husserliana X*. Nijhoff (『内的時間意識の現象学』立松訳、みすず書房)
- James, W., 1950, *The Principles of Psychology*, Dover.
- Kelly, S. D., 2005, "Temporal Awareness", in Smith & Thomasson.
- Libet, B., 2004, *Mind Time*, Harvard University Press.
- 野矢茂樹、2002、『同一性・変化・時間』、哲学書房。
- Parfit, D., 1984, *Reasons and Persons*, Oxford University Press.
- Smith, D. W. & A. L. Thomasson(ed.), 2005, *Phenomenology and Philosophy of Mind*, Oxford University Press.
- Tye, M., 2003, *Consciousness and Persons*, MIT Press.